



50 years  
of JOCV  
in ZAMBIA

Japan International Cooperation Agency

## ザンビア共和国国旗と由来

---



緑：自然資源

赤：自由のための闘争

黒：大多数が黒人である国民

オレンジ：豊かな鉱物資源

鷲（ワシ）：自由と栄光、そして困難に負けず  
突き進む国民の力を示している。

---

# ザンビア共和国国歌

## 「誇りと自由を胸に、ザンビアの歌を」

### 英語

Stand and Sing of Zambia,  
Proud and Free

1.  
Stand and sing of Zambia, proud and free,  
Land of work and joy in unity,  
Victors in the struggle for the rights,  
We've won freedom's fight.  
All one, strong and free.

2.  
Africa is our own motherland,  
Fashion'd with and blessed by God's good  
hand,  
Let us all her people join as one,  
Brothers under the sun.  
All one, strong and free.

3.  
One land and one nation is our cry,  
Dignity and peace' neath Zambia's sky,  
Like our noble eagle in its flight,  
Zambia, praise to thee.  
All one, strong and free.

### Chorus

Praise be to God,  
Praise be, praise be, praise be,  
Bless our great nation,  
Zambia, Zambia, Zambia.  
Free men we stand  
Under the flag of our land.  
Zambia, praise to thee.  
All one, strong and free.

### ベンバ語

Lumbanyeni Zambia

1.  
Lumbanyeni Zambia, na ukwanga,  
Na icilumba twange tuumfwane,  
Mpalume sha bulwi bwa cine,  
Twaliilubula.  
Twikatane bonse.

2.  
Bonse tuli bana ba Africa,  
Uwasenaminwa na Lesa,  
Nomba bonse twendele pamo,  
Twaliilubula.  
Twikatane bonse.

3.  
Fwe lukuta lwa Zambia lonse,  
Twikatane tube umutende,  
Pamo nga ulubambe mu muulu,  
Lumbanyeni Zambia.  
Twikatane bonse.

### Chorus

Lumbanyeni, Lesa, Lesa, wesu,  
Apale caalo,  
Zambia, Zambia, Zambia.  
Fwe bantungwa  
Mu luunga lwa caalo.  
Lumbanyeni Zambia.  
Twikatane bonse.



## JOCV 50周年記念寄稿

駐ザンビア日本国特命全権大使  
水内 龍太



1970年に最初の青年海外協力隊がザンビアに派遣されて以来、JOCVの活動は2020年で50年を経過しました。この記念すべき節目に当たり、駐ザンビア日本国特命全権大使として、心からお祝い申し上げます。

振り返ると、最初にザンビアに派遣された柔道普及を目的とする6名のボランティア以来、1,600名を超える日本の若者（およびかつての若者）が、JICAのボランティアとしてザンビアに足跡を残してきました。その活動範囲も、当初のスポーツ分野から社会の隅々に拡大し、農業や教育、保健医療、企業家の支援や観光に至る、ほぼすべての分野を包摂するに至りました。そして特筆すべきは、この広大な国土の最も辺鄙な場所ですら、JICAのボランティアたちが進出し、地方のコミュニティの人たちと溶け込んで活動してきたという事実です。着任以来、公務と私的活動とを問わず、ザンビアのあちこちを車で移動していますので、穴ぼこだらけの幹線道路や舗装されていない山道の果てにある地方の生活の大変さを少しばかりは想像できます。そうした何人かの方から苦労話とともに活動の成果を聞くにつけ、ボランティアの皆さんが日・ザンビア関係の最前線で活躍し、その一方で人生の貴重な経験を積まれてきたことに敬意を表します。

さて、次の言葉は前政権でインフラ・住宅開発大臣の職にあったヴィンセント・ムワレ氏が私に述べた言葉です。同氏は、前政権で最もクリーンな政治家と西側諸国大使からも絶賛されていた方で、私のサッカー仲間でもあります。それは、ボランティアと地域の子供との触れ合いがいかに大きな影響を残し得るかを示すものです。

「私が小学校に通っていたころ、日本人の女の先生が数学の教師として赴任してきた。しかし、その先生から私は、数学だけでなく、規律と時間厳守の大切さを学んだ。」

過去2年間、コロナ禍は世界中の外交活動やJICAによる対外支援に大きな試練を与えました。

日本への退避を余儀なくされたJICAボランティアもその例外ではありません。ザンビアにおけるコロナ禍が日本に先駆けて収束した今、過去の成果を讃えるのと同時に、将来の課題についても考えるのは時宜に適っています。分野別に挙げると、ザンビアにおけるSTEM教育の底上げと並行して、日本語教育の分野の充実をより積極的に探究すべきです。政府関係機関の多くの方がJICA研修を通じ知日派となっていますが、若い学生の日本への留学の道を開くこと、少なくとも言葉を通じ日本をザンビアにより近い存在にすることが期待されます。また、ボランティアの離任後に、その活動の成果をいかに持続可能な形で未来に引き継いでいくかは最も根本的な課題ですが、その答えは日本とザンビアの双方が知恵を出し合って見出していく必要があるでしょう。

最後に、私のささやかな希望としては、JICA本部がボランティアの健康と安全を科学的・現実的にケアしつつ、これだけ大きな成果を挙げてきたJICAボランティアの諸兄諸姉をコロナ以前と同等の水準まで一日も早く復帰させていただければと思う今日この頃です。末筆ながら、JICAボランティアの今後50年の一層の発展を心から祈念しつつ、私の祝辞に替えさせていただきます。

令和4年3月吉日



# もくじ

徳橋和彦 JICAザンビア事務所長メッセージ .....	01
------------------------------	----

河野裕之 ザンビアOV会代表メッセージ .....	02
---------------------------	----

JICA海外協力隊 50年間の派遣推移と活動概況 .....	03
--------------------------------	----

## JOCVのみなさんから

松下 文治さん	S44 (1969) 年度3次隊、H14 (2002) 年度9次隊 (柔道) .....	06
木下 史夫さん	S57 (1982) 年度2次隊 (生態調査) .....	07
西川 和夫さん	S60 (1985) 年度2次隊 (生態調査) .....	08
池永 務さん	S62 (1987) 年度1次隊 (理数科教師) .....	09
佐古 眞三東さん	S62 (1987) 年度1次隊 (稲作) .....	10
新田 和弘さん	S62 (1987) 年度1次隊 (生態調査) .....	11
飯塚 (田畑) 敬子さん	S62 (1987) 年度3次隊 (秘書) .....	12
井上 真吾さん	S63 (1988) 年度2次隊 (獣医師) .....	13
小川 (曾根) 智子さん	S63 (1988) 年度2次隊 (薬剤師) .....	14
徳橋 (瀬戸口) ひとみさん	S63 (1988) 年度2次隊 (看護師) .....	15
田辺 修さん	S63 (1988) 年度3次隊 (理科教育) .....	16
山本 美香さん	H元 (1989) 年度2次隊 (家政) .....	17
奥村 正裕さん	H2 (1990) 年度1次隊 (獣医師) .....	18
今榮 博司さん	H4 (1992) 年度1次隊 (生態調査) .....	19
大西 孝規さん	H4 (1992) 年度1次隊 (理数科教師) .....	20
山本 ひとみさん	H16 (2004) 年度9次隊、H17 (2005) 年度9次隊 (婦人子供服) .....	21
高橋 麻友子さん	H20 (2008) 年度1次隊 (音楽) .....	22
安藤 広実さん	H20 (2008) 年度4次隊 (村落開発普及員) .....	23
山田 義昭さん	H26 (2014) 年度4次隊 (自動車整備)、2018年度2次隊 (柔道) .....	24
中山 かおりさん	H27 (2015) 年度1次隊 (小学校教育) .....	25
加藤 秀男さん	2017年度2次隊 (経営管理) .....	26
横山 敬子さん	2017年度2次隊 (観光) .....	27
坪井 健悟さん	2017年度4次隊 (小学校教育) .....	28
野中 日香里さん	2017年度4次隊 (小学校教育) .....	29
原田 香澄さん	2017年度4次隊 (PCインストラクター) .....	30
真岩 亜里沙さん	2017年度4次隊 (家政・生活改善) .....	31
澤村 啓之さん	2017年度4次隊 (経営管理) .....	32
大澤 明浩さん	2018年度1次隊 (小学校教育) .....	33
小林 さな子さん	2018年度2次隊 (野菜栽培) .....	34
原田 直美さん	2018年度2次隊 (小学校教育) .....	35
塩見 善則さん	2018年度2次隊 (経営管理) .....	36
原 汐音さん	2019年度2次隊 (小学校教育) .....	37

## カウンターパートのみなさんから

Dr. Julius Kaoma	National Council for Scientific Research .....	39
Mrs. Professor MPS Ngoma	University Teaching Hospital .....	40
Mrs. Prudence Mwaanga	Moomba Primary School .....	41
Mrs. Annah Nawa	Chilanga DACO .....	42
Mr. Moto Ng'ambi	ZCSMBA .....	43
Mr. George Chikampa	Prince Takamado Primary School .....	44

JICAザンビア事務所歴代関係者一覧 .....	46
--------------------------	----

## 参考資料

ザンビア共和国概要  
50年間の派遣実績

## 協力隊OVとして、所長として

徳橋 和彦 JICAザンビア事務所長

(ルサカ／豆炭製造／国立科学技術研究所／S62(1987)年度2次隊)



ずっとザンビア赴任を希望していた。私が隊員として活動していた国。ここでもう一度若い隊員たちと一緒に仕事をしたいと思っていた。

赴任することが決まったのは2019年11月のこと。新型コロナウイルスの最初の患者が中国で発症したとされるのはその翌月の12月だった。そのときはまだザンビアでの勤務がこんなに過酷なものとなるとは夢にも思わなかった。

2020年3月16日、40名ほどの隊員が事務所の会議室に集まった。帰国を控えた隊員の最終報告会を聞きに来た人たちである。その時、まさかそのわずか3日後に活動中の全隊員63名がザンビアから姿を消してしまうことになるとはだれ一人想像していなかっただろう。私の赴任からまだ1ヶ月も経過していなかった。帰国便に向かう隊員たちを乗せたバスの中でお話ししたことは今でも忘れられない。



ザンビア派遣の同期隊員と広尾訓練所にて

「皆さん、必ずザンビアに戻って来てください。隊員のいないザンビアなんて、私にとって本当のザンビアではありません！」。

しかし実際に隊員の方で再赴任できた方はわずか4名。退避一時帰国から1年以上の月日が経過していた。ほとんどの方はふたたびザンビアの地を

踏むことなく活動期間の終了を日本で迎えることとなってしまった。どんな気持ちでその日を迎えたのだろう。彼らの無念さを思うと、今でも心が痛む。

50年。これまでザンビアで活動してきた1,600名以上に及ぶ隊員の一人ひとりの人生の積み重ねでもある。楽しい思い出ばかりではなかったはずだ。苦しい思い出もしてきたし、何度も挫折を味わい日本に帰りたと思った人もいたはずである。しかし、2年間の活動期間を全うした人たちが最後に口にするのは同じ言葉だ。

「ザンビアに来てよかった」。

常々思うことがある。

「日本の人たちに協力してほしい」と願うザンビアの人たちは数多くおり、またその求めに対して、「自分の経験を生かしたい」と思っている日本人もたくさんいる。そんなお互いの気持ちが続く限り、ここザンビアには隊員が派遣され続けることだろう。それを協力隊員OVとして、そして所長としてこれからも支援し続けて行きたい。

最後になるが、この50数年にわたる協力隊事業の中で、活動中に4名の隊員が命を落とした。私自身、活動期間中に後輩隊員を亡くした。今後二度とこのようなことが起こらないよう心から誓うとともに、彼らの冥福を祈って私の言葉としたい。



配属先の同僚と

## JICA海外協力隊ザンビア派遣50周年に寄せて

河野 裕之 ザンビアOV会代表

(カシシ／青少年活動／カシシ孤児院／HI4(2002)年度3次隊)



この度は、JICA海外協力隊派遣50周年、誠にありがとうございます。

私が帰国してから20年近くが経った今でも、時々ザンビアの自然豊かな景色や人々の笑顔を思い出します。ザンビアで隊員として過ごした2年間で経験した様々な出来事は、今もそれぞれのOVにとって貴重な財産であり、この先も忘れる事のない思い出となっているのではないのでしょうか。



三者面談の様子

ザンビアに来たばかりの頃、日本人として奇妙に感じた出来事や文化にも背景や理由があり、それを2年間の長い時間をかけて理解していく過程は、どの隊員OVも経験したことと思います。私だけでなく、多くの隊員OVにとって、ザンビア社会やザンビアの人々に役立つように、ザンビアの人々と手を取り、日々奮闘し模索し続けた隊員活動であったとともに、習慣、文化、宗教、ジェンダー、価値観など、物事をみる視点が大きく変化したことを実感し、その結果、彼等から有形無形の恩恵を受けることとなりました。これは協力隊に参加しなければ、決して得られなかった大切な経験です。

OVとなった今は、我々がザンビアから学んだ事を日本や国際社会にお返しする番であります。例

えば2022年現在、世界中で猛威を振っている新型コロナウイルスによる未曾有の困難により、誰もが先行きの見えない不安と戦っています。日々の生活の中で、些細な事に苦心したり苛立ったりする事もあるでしょう。そんな時、私たちOVは、JICA 海外協力隊で培った精神、そしてザンビアの人々の逞しさを見習って、困難を乗り越えていければと思います。

1970年の派遣当初から、綿々と受け継がれているザンビアと日本との繋がりを大切に、帰国した隊員が、ザンビアで得た体験を、それぞれのフィールドで還元し続けていくことを願ってやみません。

最後に、ザンビアのこれからの平和と発展、そしてザンビア協力隊事業の発展を心よりお祈り申し上げます。



元気いっぱいの子供たち  
(配属先の孤児院にて)



# JICA 海外協力隊 50年間の派遣推移と活動概況

## 1. 1970年代（昭和44年度3次隊～昭和54年度2次隊）

1970年3月、青年海外協力隊 昭和44年度3次隊、6名の柔道隊員が初代隊員としてザンビアに到着。この派遣を皮切りにザンビア警察の他、郵便・電話公社、航空局等において、社会基盤の整備、人材育成を目的とした隊員派遣が行われた。主な派遣職種は、拳銃を持たない警察官への武術指導を行う柔道隊員、独立後の社会基盤を整備するための電気通信、無線通信機、自動車整備などの技術指導が中心であった。また、1970年代後半には獣医師、養鶏といった農業分野の隊員の派遣も始まった。当時の協力隊員の活動は、常にザンビア国内の物不足、人材不足に悩まされつつも、カウンターパートや同僚職員と共に働き、技術と経験を伝えることで、ザンビア人指導者育成のための基盤づくりに貢献した。

## 2. 1980年代（昭和54年度3次隊～平成元年度2次隊）

農業・畜産業（稲作・獣医師等）、保健（薬剤師・看護師等）、教育・職業訓練（理数科教育、音楽、美術、建築、自動車整備等）など、派遣分野が多岐にわたるようになる。1980年代前半は大学、職業・教育訓練校等における指導者育成に関わる隊員の派遣が多かったが、時を経るに従い、地方行政機関、病院、学校などへの現場技術の底上げのための派遣が増加。特に深刻な獣医師不足となっていた畜産業において、多数の獣医師隊員が農業事務所や研究所、獣医師養成機関に派遣され、技術移転を行った。1986年に創設されたザンビア大学獣医学部では、日本人専門家と共にザンビア人教官の育成に携わり、専門家は主に講義、協力隊員は解剖等の実習を担当し、人材育成に貢献。現在、同獣医学部では当時の学生が教授や講師となり、アフリカ有数の獣医学部となっている。また、保健分野、教育分野においても、当時の隊員達の同僚や教え子がそれぞれの分野において要職に就くなど、重責を担う立場となっており、今日のザンビアに大きな影響を与えている。

## 3. 1990年代（平成元年度3次隊～平成11年度2次隊）

1990年代は教育・職業訓練分野への派遣は全派遣数の約50%を占め、特に現場の理数科教員不足を補うべく100名近くの理数科教育隊員が全国各地に派遣され、生徒達に学習機会を提供し、同僚達とは協働することで互いの指導技術の向上に努めていた。また、職業訓練分野では自動車整備隊員を主として、拡大する経済活動を支えるための人材の育成に貢献した。加えて、国内主要産業の一つである農業分野において、地方村落の農業振興を図るための隊員派遣が増加。特に1998年から西部州モング地区とセフラ地区で実施された農村開発のための協力隊グループ派遣は、無償資金協力によって建設された約200haの灌漑施設、マーケット及び訓練施設の活用を図る活動を行った。農民組織の強化と相互扶助の促進、水利組合の規約整備を行い、農産物（特に稲作）の生産性向上、作付け面積拡大に結びついた。現在では、同地区の米は「モング米」として国内市場での認知を得ている。



#### 4. 2000年代（平成11年度3次隊～平成21年度2次隊）

2000年代も教育・職業訓練分野への派遣が主体となっており、全派遣数の60%を占めている。SMASTE授業研究支援プロジェクトとの連携、広島大学国際協力研究科との連携により、同学修士学生を理数科隊員として派遣するなど、教育の質の向上に焦点を当てた派遣が主流となる。職業訓練分野ではニーズが多様化・高度化する中、日本の団塊の世代の豊かな知見を活かすべく、2001年にはシニア海外ボランティア（当時の名称）の派遣が開始された。シニア海外ボランティアは主に産業育成分野で高い技術力を活かし、職業訓練校での教員の技術向上、組織経営の改善など大いに活躍した。また、21世紀の多様化する社会のニーズに応えるため、行政機関へのコンピュータ技術隊員の派遣、学校やHIV孤児・ストリートチルドレン保護施設への青少年活動隊員派遣、そして政府機関やNGOに感染症対策隊員を派遣するなど、主要派遣職種に大きな変化がみられた。教育分野への派遣が多かった時期でもあり、現在の政府や学校関係者においては過去に協力隊と関わったことがある中堅人材も多く、自身の現在の勤務先にも是非協力隊を派遣して欲しいとの要請を受けるなど、当時の質の高い隊員活動が現在においても評価されている。

#### 5. 2010年代（平成21年度3次隊～現在）

教育分野への派遣は47%を占めており、派遣の中核を担っているものの、現地ニーズ及び日本国内における協力隊参加層の変化に伴い、教育分野における主要派遣職種も理科教育、小学校教育、PCインストラクター、そして体育等に変化している。過去に培った各種JICAプロジェクトとの連携の知見を活かし、「教員養成校と学校現場との連携による教育の質改善プロジェクト(IPeCK)」における実施協力において、隊員が実際現場でのフォローを行うことで相乗効果がみられている。農業分野においても「農村振興能力向上プロジェクト(RESCAP)」や「コメ普及支援プロジェクト」と連携し、地方農業事務所にコミュニティ開発隊員（旧:村落開発普及員）を派遣することで園芸作物の普及、稲作（ネリカ栽培）普及が進んでいる。また、シニア海外協力隊は日本や諸外国での多様な経験をもって商工会議所や連合会の中央組織、また教育機関や病院など様々な機関にて経営管理や組織運営改善に貢献している。

JOCVのみなさんから

## ムリバンジ太陽の国

松下 文治さん

(ルサカ／柔道／ザンビア警察訓練学校／S44(1969)年度3次隊)

(ルサカ／柔道／ザンビア柔道協会／H14(2002)年度9次隊)



ザンビアでの一番の思い出は、何と言ってもケネス・D・カウング大統領から“My brother Bunji”と言われて以来、カウング大統領と何度も出会いお付き合いした事です。また、飛行機で2人で旅をした事もあり、その時の2ショットの写真が、開隆堂出版の小学5年生の英語の教科書の“マイ・ヒーロー”というページに、「アフリカに柔道を広め日本の文化を世界に広める活動している人物」として、過去のヒーローの西郷隆盛と並んで掲載されました。

ザンビアでは、現地の子供達にとっても気に入られて一緒に畑を作ったり、バナナを取りに行ったり、自転車で草原を走ったりと色々な思い出があります。そして、ザンビアの人だけではなく、インド人のドクター・リンバダと知り合い、毎週末、カリバダムの別荘に招待され、そこで、娘さんのクキさんから水上スキーを教えてもらいました。その親戚のリンバダファミリーの兄弟3人が経営をしていたザンビアで一番大きなスーパーマーケットの家族とも交流が深まり、毎週のようにカレーを食べに誘われました。

ザンビアの太鼓を教わる



ザンビアのカウンターパートでは、体育の教官のボーサと仲良くなり、ドラムの叩き方を教わりました。現在までに600回以上、日本ばかりでなく海外でも講演をしてきましたが、講演の度にザンビアのドラムを叩きながらカウング大統領が作られた

“みんなで一緒に協力し合って国作りをしましょう”という歌ティンデパモージを歌っています。

現在、私は、順天堂大学国際教養学部の特任教授をしています。昨年11月17日に特別講義を行い、最後に、ザンビアのドラムを叩きながらティンデパモージを歌いました。学生達はもちろん、教授の方々も大感動し、大拍手を頂きました。

私は、協力隊に行かなければ、私の今の人生はなかったと思っています。地元、愛媛では、30年以上に渡り、7つの市町で、国際教養講座を開講しています。その折にも子供達に、ザンビアの事を話したりしています。私の原点は、協力隊でザンビアに派遣された事です。

2000年には、かつての大統領補佐官をしていた私の友人のスワレ氏と共に、首都ルサカにジェスナ小学校を作りました。当初、28名だった生徒も現在では、130人になっています。しかし、小学校を卒業しただけでは就職ができないので、中学校を作るのに、10万坪の土地を購入しました。この土地に中学校を建設する予定です。ジェスナ小学校にはこれまでに、7人の私の教え子達を派遣し、柔道ばかりではなく、日本語、クラシックバレエ、書道などを指導してきました。そして、ザンビアの柔道協会には、毎年50着ほどの柔道着を贈っています。

現在でもこのようにザンビアとの交流が続いていることを嬉しく思っています。現在は、24色の色鉛筆を贈る準備をしています。



配属先での柔道指導

## 1980年代のザンビア派遣隊員

木下 史夫さん

(カフェ／生態調査／土地自然資源省 国立公園・野生生物局  
／S57 (1982) 年度2次隊)



最初の仕事は、埃をかぶったりサーチセンターの大掃除とその屋根裏をめぐらしていた600頭のコウモリの駆除作業だった。80年代のザンビアでは、たとえ国立公園内であってもヒトの生活障害となる生物はあっさり駆除されてしまう。野生動物に対する価値判断の基準がそもそも日本人のそれとは違う。野生動物とヒトの距離がものすごく近い。象牙を目的にアフリカゾウの密猟が激化していた時期でもあった。

隊員時代のザンビアに始まりその後暮らした他の国においても、日々さまざまな初体験を重ねる中で、まずは良く観察する、できれば自分でもやってみる、そして自分の回答を考えてみる、といったプロセスが異文化理解には必要だと気付いた。

日本で「正しい」とされている事が、世界中どこでも正しいわけではない事を経験できたこと、ヒトやモノゴトの違いを受け入れ、リスペクトすることで世界の平和と多様性を保てそうな感触をつかめたことは、私にとって協力隊参加で得られた大きな収穫の一つだ。40年も経った今でも当時の日常の様子を鮮明に思い出すことができるほど私にとって協力隊参加は深く脳に刺さる大きなイベントだったからだ。

野生動物がらみのお話は他の生態調査OBが話してくださるようなので、私は違った切り口で40年前の記憶を記録しておこう。

### <家は自分で準備せよ>

1982年10月、昭和57年2次隊の3名はルサカ空港に到着した。タンザニア上空で眼下に広がる大地のどこどこに村の焚火と思われるオレンジ色の明かりが見えて、いよいよこの深いブッシュの中で2年間のテント生活が始まるのだと気を引き締め直した。実はちょっとした情報伝達ミスにより、生態調査隊員は2年間ブッシュの中でキャンピング生活と納得していた。キャンプは嫌いでは無い。何とかなるさと万全の準備を整えて着任した。

公園局本部のあるチランガへあいさつに行った際に調査部門長から、私にも家が提供される予定だと知った。問題は家の決定に2か月ほどかかったことだ。

当時は自分の住む家なのだから自分で配属先と交渉して獲得せよということになっていた。前任者の居ないヒヨコ組の隊員にはそれは大きなハードルだったが、改めて家獲得交渉を現地語学訓練の一部とみなせば、非常に実用的なプログラムだったと言える。おかげでルサカの街に詳しくなったし、ルサカ在住の先輩隊員など多くの邦人とお会いする機会が増えた。

### <初代カウング大統領時代のザンビア>

私がいた頃のザンビアは銅採掘による鉱業が低迷し、経済が不安定となり日常的に必要なものさえ買えない状況だった。たとえば小麦粉、食用油、洗剤、たばこなどが買えなくなった時期があった。一部の高級ホテルなどを除き缶ビールも缶入りジュース類も手に入らなかった。その頃はお隣のジンバブウェには白人が様々な分野をコントロールしており日用品はもちろんのこと何でもそろう国だった。ビクトリアフォールズの橋を渡った先にはヨーロッパの田舎町のスーパー程度の店があり、ザンビア隊員ご用達のパラダイスだった。

あの頃のザンビアは正面から共産主義を掲げてはいなかったが、社会主義どちらかという東側に傾いていた。公的な機関のオフィス入口あたりには金日成が表紙に載った雑誌があったし、職場で貸与された双眼鏡はソ連製、おそらく護身用に貸与された銃器類もソ連製だったのでないか。軍隊で武道を教えているという北朝鮮の青年もいた。

東側では食品も含めあらゆる面で国のコントロールが入り国民に与えられた自由はほとんどない状態だったようだ。

カフェNPを調査地として頻繁にンゴマ村を訪れていたチェコ人の生物学者がいて外国人同士ということもあり、お互いにたどたどしい英語で話をしているうちに一緒に任国外旅行に行く間柄になった。ある日神秘的な顔で、今度家族を呼び寄せて〇月〇日にザンビアから西ドイツへ飛ぶという。密告の可能性があるので他のチェコ人には誰にも話していないのだという。当時のチェコでは短波ラジオの所持さえ禁止。河を渡って亡命を図り、川を渡りきる前に撃たれて亡くなった人もたくさんいるといった話は本人から聞いていた。自由が空気のように普通な世界しか知らなかった私には、受け入れてくれる確証も無いまま家族を連れて自国を捨てるといった選択しかできなかった人々がたくさんいることを知り、大きな衝撃だった。亡命の日、夜のルサカ空港でその一家を見送ったのは私と数人のルサカ隊員だけだった。

帰路変更（当時は認められた）で寄った西ドイツで、給食のおじさんをする彼と家族に再会。西ドイツの亡命者に対する人道的受け入れ体制に感動したのを覚えている。

チェコの友人は、その後、西ドイツのWWFで研究者として活躍し、今はチェコの故郷でたくさんの孫にかこまれた田舎生活を楽しんでいる。（この原稿を書いた後数か月で旧ソ連軍によるウクライナ侵攻が始まった。）

## 協力隊員なればこそ

西川 和夫さん  
(ムフェ／生態調査／国立公園野生動物保護局  
／S60(1985)年度2次隊)



野生生物局生態調査官としてザンビアから帰国して1年が過ぎた頃、JICAの短期派遣専門家としてケニアの野生生物保護に関わる機会を得た。赴任した1990年3月はケニア野生生物公社(Kenya Wildlife Service: KWS)が発足したばかりで劇的な変化の只中であり、KWS側の反応は鈍かった。KWSとしてみれば、日本は1、2を争うケニアへの支援国だが野生生物保護分野での実績は皆無で、インフラ整備などでは利害が反する案件も有った。また、大統領から指名された初代局長のリチャード・リーキーさんは自然保護の闘士で象牙取引反対の急先鋒。日本もKWSもある種のためらいがあったと推測した。



KWSでの最初の業務は、小型機を駆使したケニア各地の公園視察だった。同行した局次長補(KWSのナンバー3)と次第に打ち解けると、ケニアの公園行政への興味が頭をもたげた。火入れは何月で規模はどれ程か、焼き方は帯状か円形か、パトロールは何人体制で何日位行うのか、弾薬は何発くらい支給するのか、携行食は何をどれくらい何時(いつ)支給するのか、出張手当は、果ては職員が密猟に手を染めるのを防ぐ対策は、密猟取締の諜報活動は、おとり捜査は、さらには局次長補がいるのに敬礼もしないが規律がゆるすぎはしないか、等々。

なにしろこの間までザンビアで必死に取り組んできた事柄である。聞きたいことは山ほどあった。

1992年に個別専門家としてKWSで働き始めて暫くして、局次長補(既に退職)の後日談を聞いた。

3度目の公園視察を終えてナイロビの小型機専用飛行場に戻った彼は、その足で週末のKWS本部に向かい、局長室に駆け込んだという。「今度来た日本人は変な連中で、我々の事を実によく知っている。彼らになら、我々が本当に欲している事を相談していいのではないか」。

面会さえ困難であったリーキー局長が、わざわざ本部の一角にある私達の執務室を尋ねてきたのは、翌週の月曜の朝だった。

この話を局長の秘書や上級職員たちから聞いた時、協力隊員でよかったと本心から思えた。右も左もわからぬ私を受入れてくれたザンビアの野生生物局と同僚たちに深く感謝した。願わくばもう一度ザンビアで協力活動をやりたいと思う。今ならずと役に立てるはずと思うのだが。

それにしてもルアングワの我が家の寝室で夜な夜な聞いたハイエナの声、ヒョウの咳き込むような声、壁越しに響く雷のようなゾウの腹の音、カバのほえ声と草を食むブツブツという音の何と懐かしい事か。ケニアでも他の国でもレンジャー達と野宿しおびたしい夜を過したが、断言しても良い、あれほどワイルドな夜を過せる場所は他に無い。

私に野生生物局の局長とはどうあるべきかを示してくれたリチャード・リーキー博士は、2022年1月2日にこの世を去られました。

I still respect him.



## カロモの日々

池永 務さん

(カロモ／理数科教師／カロモ中高等学校／S62(1987)年度1次隊)



派遣された1987年、現在の南アフリカ政権のANC本部が、反アパルトヘイト政策の最前線としてザンビアのルサカにあった。南アフリカからの輸入品も無く、カロモも地元で取れる農作物以外、加工品は店頭が無いのが常。ビール（ラベルはついてなかったものの皆さん曰くMOSI）がたまに町に届くと、カロモホテル（ホテル？）でささやかなお祭り。高級品だったビールの代わりはチブク。給水車ならぬ給チブク車で、持参のポリタンクに注いでいく。飲むと頭が痛くなり、腹もぐるぐるした。



日本のニュースは2ヶ月遅れで届く新聞ダイジェストのみ、心待ちにして食べるように読んだ。初めの半年は家に電話がなく、郵便局で列にならび、交換手に番号を伝えて繋げてもらう。電話のためだけに



カロモより奥の村から何時間、何日もかけて来る人もあり、通信の重要性を肌で感じた。

帰国後、通信機器関係の会社に就職。出張で何度かザンビアを訪問する度に、南アフリカ系のスーパーマーケットがそこかしこに建ち、物が溢れ、携帯電話が普及し、急速に発展し躍動する姿を目の当たりにし、その底力に驚いた。



派遣された2年間、60名余の生徒のクラスの担任を受け持ち、指導は英語。拙いそれを生徒がからかい、こちらが注意しようとする、大笑いされて悔しい思いをした。Times of Zambiaを毎日読み込み、ある程度会話ができるようになり、その後の仕事につながったかなど。

無邪気な生徒たち、カロモに感謝。

## モング米がブランド米に???

佐古 眞三東さん

(モング／稲作／農業省西部州事務所／S62(1987)年度1次隊)



ザンビアでの任期を終え、バブルでバカ騒ぎ中の日本に帰ってきたのは既にはるか昔の事となってしまいました。

その後も、農業開発の仕事にたずさわり、アフリカでの活動機会も多かったのですが、残念ながらザンビアにはいまだに帰れていません。

とは言え、ザンビアでの開発業務に参加している同僚は多いので、チテンゲを土産に頼んで買ってもらったこともありました。その中の一人は、オレが頼んだチテンゲ選びを口実に、プロジェクトの女子スタッフを買い物に連れ出して仲を深め、結局、日本に連れて帰り結婚しました。



JICA技術プロジェクトによる稲作指導

そんなふうに、ザンビアについての情報には事欠かない日常ではありますが、ある時、ザンビアから帰ってきたヤツが「今年もモング米が買えなかった」と嘆いている声が耳に入りました。今から10年以上前の事です。

当時、モングで作られるコメがそんな有名になっていることを全然知らなかったオレが「今、何て言った？ モング米だって??？」と、襟首つかんで聞き返したのは当然でした。

聞いてみると、モング産のSupa品種は旨いコメとして人気で、つてを頼ってもなかなか手に入らないプレミアム米とのことでした。

最近の帰国者情報によると、今ではルサカのスーパーでモング米と銘打たれた袋がごく普通に棚に並

べられているとのことでした。

オレより前に、二人の先輩稲作隊員がモングにいったん赴任したものの、すぐに別の任地へ異動してしまったので、モングに居ついた初めての稲作隊員がオレということになります。

カラハリサンドに難儀しながらの村通い、炎天下で水路や畔を作ってもタバコをポイ捨てすれば一晩で灰になってしまう泥炭地獄、ザンベジの水嵩や流れと闘いながらのコメづくりと、たしかに稲作隊員逃げ出したくなるような環境ではありました。

任期2年目の雨季に、ザンベジ氾濫原とダンボで在来三品種の栽培比較試験をして、関数電卓で収量データの分散分析に明け暮れた末に、「“Supa”を作って高値で買ってくれる業者に売るのが農家にとって最善」という現地に残すべき提言がまとまったのは、日本へ帰るためにモングを引き揚げる前日でしたし、後任隊員の派遣もありませんでした。

農家のその後の努力には敬服するしかありませんが、水資源は豊かであるものの稲作適地とは言い難かったあのモング周辺が、その後ブランド米の産地に育っていった過程はいまだに想像がつかず、目を閉じて浮かんでくるのは、ザンベジに沈む夕陽とそれを眺めながらアコモ（住居）の屋根瓦の上で呑んだモシの味だけです。



引き継がれる稲作指導

(JICA技術プロジェクト撮影の写真を拝借)

## ゾウの群れとの接し方

新田 和弘さん

(ンゴマ／生態調査／国立公園野生生物局／S62(1987)年度1次隊)



赴任1年目の乾季も進んだある日の午後のことである。前任者が苦勞の末に獲得した白いジムニーに乗って、いつものようにスカウト2人と調査に行った帰り道、20頭ほどのゾウの群れに出くわした。当時はゾウの耳や牙の形などから個体識別を試みていたので、これはいい機会と車を止めてゾウに近づこうと歩き出した。あれっ？スカウトがついてこない。声をかけると、しぶしぶといった感じで車から降りてきた。しばらく双眼鏡をのぞいてゾウを観察していると、そばで見ていたスカウトがそわそわし出した。あのゾウがこっちを見ていると言う。そうか？と思ってゾウの群れに視線を戻すと、前の方にいる数頭が鼻を空中に上げてにおいを嗅いでいる。でもトランペット音は出さない。そのうち一番大きな雌が右前足を上げてぶらぶら左右に振り出した。転移行動と言われるもので、緊張している証拠だ。でもまだ大丈夫、群れとの距離は100mはある。スカウトが言う「Mr. Nitta! 車に戻ろう」と。「ああ、もう怖がってる。これが仕事だろ！」などと思いつつゾウを見ると、一歩、二歩とこちらに歩き出している。あれっ？と思っているうちに速足となり、あっと言う間に群れ全体が駆け足で真っすぐこちらに向かって来るではないか。それも音を立てず静かに、両耳を前方に寝かせて。これはまずい、早く車に戻らないと、と振り向くと、スカウトはすでに車のドアを開けている。

私が運転席に飛び込んだ時にはゾウの群れとは30mほどか。狭いジムニーの車内はてんやわんやだ。後部座席に乗ったスカウトが助手席のもう一人に護身用の散弾銃を手渡している。私はといえば先輩隊員の忠告も忘れ、エンジンを切っていたので、車の鍵をズボンのポケットから取り出すのに四苦八苦。なんとか鍵穴に差し込んだその瞬間、スカウトの発砲音が轟いた。ゾウとの距離は5mあるかないか。幸いだったのはエンジンが一発でかかったこと、一目散でその場から逃げ出した。バックミラーに追ってくるゾウの姿はなかった。10分ほどで自宅のあるキャンプに戻り、ソファに座ってチョコレートを一粒口に入れた時、冷や汗がどっと噴き出てきたことを思い出す。

ちなみにゾウの襲撃にはモックチャージという見せかけの攻撃もあるが、この時はおそらく本当の攻撃だったと思っている。密猟が激しかった80年代後半であり、ゾウの人に対する攻撃性も高かった。それでもスカウトの銃口はゾウの頭の上、空中に向けられていた。危機的状況下での咄嗟の判断に、国立公園で長年野生動物の保護に取り組んできたスカウトの本質を見たような気がした。

それまではプライドばかり高くて、思うように調査ができないと感じていたスカウト達だったが、この時を境に彼らに対する見方が変わった。当時50歳を過ぎたくらいか、独立後も英国の生態学者に訓練を受け、長年ザンビアの野生動物調査や密猟対策に携わってきた人達だ。アフリカの野生動物について何も知らない20代半ばの日本の若者がボスになり、内心辟易していたに違いない。

今となっては遅すぎるが、そんな私の活動を現地です3年間支えてくれたスカウト諸氏に心から敬意と謝意を表したい。



密猟されたゾウを計測するスカウト



## 「生きる力」 —アフリカは近くに行きて学ぶもの—

飯塚(旧姓 田畑) 敬子さん  
(ルサカ/秘書/JICAザンビア事務所/S62(1987)年度3次隊)



任期満了してから30年以上経ちました。振り返れば、ザンビアでの日々は「自己」を再分析し、「生きるとは」を考え、「生きる力」を鍛えた時間でした。

30歳目前、通勤電車の中刷りで見かけた募集説明会に「行ってみるか」がきっかけでした。途上国で役立つような「手に職」もなかった自分に秘書隊員という都合のよい職種があった、二次試験が日曜日だった、「もしかして行ける？」の予感が現実になりました。

ラッキーが重なった明るい予感は空港に降り立ったときまででした。案の定、見込みの甘い我身に災難は次から次へ。現地訓練中にマラリアを罹ったのを皮切りに任期中3か月に1度の病気やケガ、ほぼ通年水の出ない住居や塩も砂糖も食用油も普通には買えない日常、自己防衛本能からか10kg以上の激太りは反復する病気も誘発、加えて他の隊員とは違う活動形態で「これでいいのか」と自問自答する負のスパイラルに落ちてました。任期短縮も頭をよぎり始めた頃、日本から隊員OVの関係者が事務所を訪問され、隊員はランチに誘われました。食事中「隊員の使命ってなんだと思う？」と質問され、期待される答えを模索中モゴモゴしていると「一番はね、生きて日本に帰ることだよ」と一言。その時、任期満了の一本道が見えました。

事故や病気で亡くなる隊員も珍しくなかった当時、せっかくの2年間をフル活用して任国や他のア

フリカを見て、聞いて、体験してサバイバルして日本に帰るゾ!と決意したとたん、日常が違って見えました。水の出ないアパートでの暮らし、スーパーのレジやバス乗り場での横入り、タクシーや郵便局での「結婚して日本に行こう」攻撃、殿様商売のインド人商店主、事務所の秘書達のマイペースな仕事ぶり、それらへの対応を修行と思えるようになりました。一方、目いっぱいおしゃれして組織の要職で生き生き働くザンビア人女性達を見て「女であることもそれほど悪いことじゃないのカモ」と思えてきました。

協力隊として赴任した人生初のアフリカ生活は冒険と発見に満ちていました。イライラもしましたが、厳しい環境で生きることによって一瞬懸命な現地の人達のある種なんでもありな感覚との駆け引きは新鮮でした。それに「生きていることは実は特別なこと」と気づけました。帰国後、別の意味で過酷な日本社会でなんとか自分らしくサバイバルできています。それも、協力隊に参加できてザンビアでの2年間があったおかげ様です。

50周年おめでとうございます。

## 私にとってのザンビアでの色々な思い出

井上 真吾さん

(ルサカ／獣医師／ザンビア大学獣医学部／S63(1988)年度2次隊)

### ①ザンビアで一番の思い出

いろいろな思い出がありますが、愛猫「東風（コチ）」についてお話ししたいと思います。コチは同期隊員の部屋に子猫が飼われるようになり、居づらなくなったのか近所に住む私の部屋を訪れるようになりました。束縛しないよう自由に入出りさせ、少しずつ間隔を狭めていき、ようやく私の膝に両前足を載せてきたときは、やっと家族になれた気がしました。そして任期が終わりコチを連れての帰路変更旅行では、パリの公園で犬に追いかけて木に登ったり、飛行機の中ではちゃんとおしっこを覚えて無事用を足せたり、無事一緒に帰国できました。その後、広島の実家で私の両親と7年過ごし、私の代わりに親孝行をしてくれました。

### ②カウンターパートや配属先。現地人との思い出

ザンビアではたくさんの良い人と巡り合うことができ、その中には悲しいお別れをした人もいます。私は、赴任先のザンビア大学の最初のテクニカル・スタッフとはそりが合わず、病理学の教員とは狂犬病の診断でけんかとなり、JICA専門家には厳しく指導され、当初かなり苦労していました。そんな中、ガーナ出身（たぶん）の臨床講座の大変年配の先生が、私と廊下で会うと、「シンゴ、元気か?!」と声をかけてくれていました。私の所属する疾病制御講座とは違うのに、よくお声をかけてくださり、とても救われた思いがしました。その先生

も私の任期中に病死され葬儀に参列し、とても悲しかった記憶があります。でも彼に倣い、若いスタッフやあまり状態が良くないスタッフにはできるだけ声をかけてあげるように心掛けています。

次に、教員候補者としてイギリス留学から帰ってきたアーロン・ムエネさんはとても大人で、私の良き相談相手になってくれました。2016年8月に開催されたTICADVIで25年ぶりに彼とケニアの大会会場で再会し、一緒に「ティエンデ・パモジ」を合唱しました。2019年に彼はご病気で亡くなられたそうで、素晴らしい友人を亡くしてとても悲しくなりました。

### ③協力隊活動を今振り返って感じること

色々な協力隊員と出会えたこと、色々な専門家と出会えたこと、色々なザンビア人と出会えたこと。今でもあの時はこうすればよかった、ああ言えばよかった、と反省し、今度同じような光景に出くわしたら今度こそこうしようと、現在のケニアでの仕事や生活に活かしています。私にとって大切な海外生活の原点です。

## ザンビアでの、忘れ得ぬ人々

小川(旧姓 曾根) 智子さん  
(ルサカ/薬剤師/エブリンホン学芸商業短期大学  
/S63(1988)年度2次隊)



日本では、製薬会社に勤めていた自分が、ザンビアの大学講師として薬学を教えることになり、英語力にも薬学力にも自信がありませんでしたが、生徒達はとても優秀で、私のつたない英語の授業を大変良く理解し、サポートしてくれました。

生徒達はよく放課後残って、割れたビーカーやら試験管やらを四苦八苦しながらつなぎ合わせて、私の授業で説明した高価な実験装置の原理模型とでも言うべきものを組み立てて、職員室にいる私を呼びに来て、何度か驚かされました。そんな時は、自分の怠惰な学生時代を思い起こし、恥ずかしさで一杯になりました。30年経った今でも、彼らのキラキラした強い瞳は忘れられません。

そこで私は勇気を出して、彼女に、「一度、あなた家に遊びに行きたい。」と伝えると、彼女は、とてもうれしそうに、「OK, Let's go!」と言ってくれたので、さっそくお土産のお菓子を持って、自転車を転がしながら、彼女の後に着いていきました。

彼女の家は、コンパウンドと呼ばれる、ザンビアで最も貧しい人々の集団居住区にあり、想像以上の汚なさ、不衛生さにびっくりしました。いつの間にか大勢の子供たちが出てきて、私の自転車に触ろうと押し合いもみ合いの大変な騒ぎになってしまいました。それでもロダはニコニコ、平然と歩いて行きます。やっと彼女の家にたどり着くと、電気も水道もガスもカギも無い、狭い空間に、3人の子供とロダの妹が座っていました。ロダはうれしそうに、集まってきた人々にお菓子を配っていました。

帰り道、コンパウンドを抜けると、広い草原に黄色い花がたくさん咲いていました。その美しさにうっとり眺めていると、ロダはその花を次々と折って大きな花束にして、「This is for you.」と言って私に差し出したのです。私は胸が一杯になって、「Thank you very much.」と言って花束を両手で受け取り、胸に抱きしめました。

そこで二人は別れ、一人で歩き始めると、涙がどんどん流れて止まりませんでした。



そして、ザンビアでの一番忘れ難い人物は、サーバント(お手伝いさん)として雇っていた、ロダという女性です。年齢は当時48才。

とても働き者で、正直者でした。貧しいことを苦にしている様子も無く、私がタバコを切らした時にはナント3本も！気前よくくれたり、私がダンスの練習をしているリビングの床を、いつも汗びっしょりになって、ピカピカに磨き上げてくれていました。

しかし、他の日本人隊員から、「決してザンビア人に心を許してはいけません。サーバントが主人の物を盗んで、そのままいなくなるのは日常茶飯事だから、一度、彼女の家の場所を確認しておいた方がいい。」と言われました。



## 隊員活動を振り返り今ルサカで思うこと

徳橋(旧姓 瀬戸口) ひとみさん  
(ルサカ/看護師/ザンビア大学付属教育病院  
/S63(1988)年度2次隊)



あれからもう30年経ちます。JICAボランティア派遣20周年記念行事で大統領官邸に歩いて行ったことを昨日のこのように鮮明に覚えています。

50周年記念誌に投稿するにあたり、隊員活動時のアルバムを開けて隊員活動を思い返してみました。

私は日本政府の無償資金協力で建てられたザンビア大学医学部病院(UTH)のD-blockの新生児集中治療管理室(NICU)で働きました。NICUはお金がかかります。機材も人も専門性が高く、当時のザンビアの経済状態ではとても維持していけません。そもそもオムツやミルクさえも確保できない状況でした。この国にNICUって必要なのかいつも疑問を持ちながら活動していました。苦しいことが多い二年間でした。敗北感いっぱいザンビアをあとにした日のことを思い出します。



アルバムの中には笑顔があふれ、あれこれと案外に頑張っていた自分を見ました。またこのたび改めて調べてみると、五歳以下の死亡率や妊娠死亡率は周辺諸国(ボツワナを除く)と比較して、格段に低いことがわかりました。小児医療では特に周産期の指標は国の経済や教育が大きく影響しますが、ザンビアの経済や教育レベルが向上し、さらにこのNICUから多くの人材が育成され、教育の機会拡大が小児医療の水準を押し上げてきたのかと考察すると意味のある援助で、少しばかりそのお手伝いが私

もできたのかと見直しています。



今、夫の随伴家族としてふたたびザンビアで生活しています。隊員時代に自転車で走った道を今、自身が運転する車で走ると不思議な気分です。好きなのはルサカゴルフ場に沿ってカブロンガに向かう道です。その風景は今もあまり変わらずタイムスリップしたような気持ちになります。

このたび寄稿の機会与えてくださいました現ボランティア調整員の方々に感謝します。さらに協力隊活動は沢山の方々の支えと理解があって成り立つことを今回の赴任で立場を変えてみる事ができました。これからも末長く、ザンビアとの友好関係を深めてほしいと懇願します。



## 63年度3次隊の拠り所として

田辺 修さん

(ペンバ/理科教育/ペンバ中高等学校/S63(1988)年度3次隊)

令和3年11月、約20年ぶりにザンビアを訪れ、すっかり変わってしまった街並みや道路の中に何とか思い出を探り出そうと車窓から食い入るように外を眺めました。

あそこはスズヒロさんが住んでいたフラット、UNZAがここだから向かいには勝間さん、ノースミードには福田さんや佐々木さん、エブリフォンカレッジには佐藤君と安齋さん、次から次へと同期隊員の姿と思い出が浮かんできます。チランガのリライ警察学校では野村さんと志鎌ちゃんが柔道技を着ています。当時、事務所とドミトリーは隣接しており、CC（ボランティア担当調整員）の大芝さんと佐藤善子さんがなぜか叫んでいます。

しぶきを上げるビクトリアフォールズ、ルナレインボー（満月にビクトリアの滝にかかる虹）、まっすぐな道、象とキリン、ルックアップツリーから見上げた満点の星、そして笑顔のザンビア人。でも最後に思い浮かべるのは、なぜかペンバ・セカンダリースクールの教員宿舎の裏から眺めた何の変哲もない原っぱなのです。これが原風景となって、協力隊の思い出が収束し、その後の人生の拠り所となっています。もう一つの拠り所とともに。

隊員として赴任したのは平成元年4月、それから3分の1世紀、63年度3次隊の同期19人はそれぞれの人生を精一杯生きてきました。残念なことに、マンサの臨床検査技師の稲垣幸子さんを赴任中に亡くし、帰国後にはずっとお世話になった獣医師の小林

秀樹さんが急逝されました。稲垣さんは今もルサカのレオパードヒル墓地で眠っています。これまで多くの関係者の方々にお墓の世話をさせていただいたことに同期の一人として感謝申し上げるとともに、63年度3次隊として活動した証として、今後ともよろしく願いいたします。

50周年誌の寄稿文としてはふさわしくない文章となったかもしれませんが、最後に海外協力隊50周年を心よりお祝い申し上げます。



稲垣隊員が眠るお墓（修繕前）

編集者注）

2022年に稲垣隊員の三十三回忌を迎えたことを機に、JICAザンビア事務所でお墓のプレートの修繕を行いました。

## ザンビア海外協力隊派遣50周年によせて ～今に繋がる道を歩く～

山本 美香さん  
(チョマ/家政/チョマ県農業事務所  
/H元(1989)年度2次隊)



随分と年を重ねた今も初めて任地に到着した日の安堵と心細さをよく覚えている。いわゆる奥地前進主義の名残がまだあった時代にナムワラ初代隊員として、他の隊員は配属先からの迎えの車が来る中、結局事務所の車で赴任したが、砂利道を延々と走ってやっと到着した時には「活動が始まる」という期待感と何もない部屋や周りの様子に「ここで何がやれるのだろう」という途方に暮れた気持ちがあった。とりあえずと言われて川沿いのゲストハウスの一間で始まった生活は、川に転がっているカバやワニを眺めながら、カバの走る速さが思ったよりも早い事に驚き、前の道を通る牛の群れの肉付きの悪さを心配し、結局1年後にチョマに任地変更するまで続いた。片道徒歩1時間の配属先オフィスまでの通勤は確かに厳しかったものの、平坦な土道をひたすら歩きながら見る夕日は力強く、その後も多くの地で仕事や生活をしたが、無心にただひたすら歩く時間を過ごすことがなくなったことを考えるとその光景は憧憬にも似た懐かしさの中にある。

ナムワラでの活動は、農村女性の生活改善や活動支援が主な要請内容であったが農村女性の生活実態調査をするにとどまり具体的なプロジェクトを立ち上げることができずに任地変更することとなった。チョマでやっと住居と呼べる場所や単車の貸与があり生活がし易くなった時には強張っていた背中の筋肉が少し楽になったような気がしたが、何かやり切れなかった思いも残すものであったことは否めな

い。任地変更後も女性の生活改善の取り組みを続けたが、実際の活動では自分で出来ることはわずかで、配属先の同僚と一緒に村を回って生活実態調査をしながら、家計の管理に関する講習会を手伝ったり、改良かまどの普及状況を調査したりと、本当に少しずつ出来ることを見つけながらの日々であった。それらを通じて自分の未熟さを痛感したことはその後の人生の教訓となっている。

ナムワラの地でひたすら歩いた道はその後の途上国との関りの中で今も続いている。いち帰国隊員として改めてザンビアとザンビアの人々に心からの感謝を伝えるとともに、半世紀に亘るザンビアの協力隊活動を支えて下さった多くの方々にこの場をお借りして御礼を申し上げたい。そしてこれからも続くザンビアの海外協力隊に幸多からんことを心から祈る。

編集者注)

山本OVは、2017年4月から2019年7月までJICA青年海外協力隊事務局長を歴任されています。

## 64回目のザンビア



奥村 正裕さん

(ルサカ／獣医師／ザンビア大学獣医学部／H2(1990)年度1次隊)

### ①ザンビアでの一番の思い出

いろんなことが集約されていた期間だったので、一番といわれるとなかなか難しいです。狂犬病にかかった動物を初めてみたこと、現地訓練でお世話になったホームステイ先の村（Chipataから結構遠かった）で温かく迎えてもらったこと、自分がマラリアに罹ったこと、交通事故で南アフリカの病院に入院させてもらったなど、みなさんにたくさんお世話になりました。



手術実習中の学生

### ②カウンターパートや配属先、現地の人との思い出

任地はJICAプロジェクトが実施されているところだったので、機材にはあまり困りませんでした。国内は生活物資が不足し、経済的に難しい状況でした。振り返れば、そんななかでも、一人の外国



故松田隊員の慰霊碑

人の若者が困らないよう受け入れて、心配りをしていただいた現地の方々の心の温かさを感じることは多かったです。職場の人たちも、バセラをたくさんもらった道端のトマトと玉ねぎを売っているおばさんも、宿舎のマネージャーも、未熟な外国人を受け入れてくれました。当時の教え子や若手教員とその後、30年以上、公私で付き合うことになるとは思っていませんでした。

### ③協力隊活動を振り返って感じること

現地の人たち、JICA事務所、調整員の方々、隊員の仲間、ザンビアの方々に、大変お世話になりました。大学院を休学して参加していましたが、そのままの道を進まなくて良かったと思っています。厳しい家畜衛生環境を知ることができただけでなく、協力隊のみなさんに人間の強さと活力を教えてもらいました。ザンビアでは、今でもいろんなところで隊員活動の“足跡”に出会います。現職で（専任ではありませんが）、任地と仕事ができる貴重で幸せな経験もさせてもらっています。ザンビアの方に“part of us”といってもらうのが恥ずかしいほど、隊員時代は貢献できていなかったのも、しっかり貢献できなかった部分を少しだけでも“恩返し”しようと考えています。コロナ禍で少し現地に行けない期間がありましたが、次のザンビア訪問で64回目になります。



講堂に集合した学生

## 生態調査隊員として国立公園管理に携わり 垣間見えたこと

今榮 博司さん

(ムフェ／生態調査／国立公園野生動物保護局チンゾンボ調査基地  
／H4(1992)年度1次隊)



私の仕事はサウスルアングア国立公園のBiologistとして、野生生物に関する情報を集め、その保全に役立てるようすることであった。Biologistというのは、国立公園の研究職のトップであるが、研究職に割く予算は殆どなかったし、Biologistと一緒に動けるカウンターパートは国立公園副監理官一人と数人のScoutと呼ばれる実働部隊だけだった。



国立公園内の火入れ

Biologistの仕事の一つに防火帯を作るFirebreakというものがある。乾季の草がある程度乾き始めた頃に計画した線に沿って焼き、その線上にはもう燃えるものがなく防火帯の役割を果たすというものである。Firebreakの仕事はScout達を引き連れて、青森県ほどの大きさのある国立公園内の防火帯を作成するという作業で、チームでミリミル、食用油、カペントを携行し数日間の野営仕事となる。食事を作るための水は、どの辺を掘れば水が出てくるのかをScoutが知っている。そうやって現地調達した水や薪を用いて食事を作って野営し、防火帯を作るというのは、観光では行けないような地域を自分の足で歩くという、非常に貴重な経験であった。

このFirebreakの仕事で国立公園北部に行った時のことだった。昼食をとるために立ち寄った廃業したロッジの建物跡を何気なしに見ると、ふと、壁に書かれた落書きに目がとまった。

“We are ready to die.”

私が赴任していた1992～1995年以前は密猟の非常に激しい時期だったと聞く。最新の銃器を持つ密猟者がサイやゾウ等の動物を殺戮することが横行し、実働部隊でパトロールするScoutがせいぜい持つ散弾銃では、密猟者とまともに向き合えば到底勝ち目はなかったと思う。ここにいたScoutはどのような気持ちでこの言葉を残したのか。どのような気持ちでこの場所にいたのか。それを一瞬のうちに想像した。今から思うと、それはその落書きを書いた人の走馬灯のようなものだったかもしれない。

パトロールに出るとわずかばかりの手当てが出るが、密猟者と鉢合わせるとほぼ確実に命を失う。そんな中だからこそ、パトロール中は自分を鼓舞しなければならない。「やれるならやってみろ。俺たちは死ぬ覚悟はできているぞ！」そういう強がりめいたものではなかっただろうか。そう思うと、密猟者と対峙することを求められていないBiologistという仕事が、彼らにとってどういう意味があるのか。ほぼ命をさらけ出すことでしか生きざるを得ないScout達のことを思うと、すごく表面的なことではないのではないか、という気持ちも生まれた。その答えは見つからないまま協力隊の任期を終え、十年近く経ってからケニアで野生生物の仕事に携わる中で、ある思いに至った。

どこを掘れば水が出てくるのかを知っているくらいその地域を熟知しているScout達にとって、国立公園を守るということは自分たちの地域や地域としての誇りを守るということではなかっただろうか。彼らは野生動物に詳しいが、それは野生動物と長年共生してきたことの裏返しであり、彼らの誇りだったのだと思う。Biologistとしてできるのは、野生動物の現状をしっかりと知ることにより、彼らのその誇りを尊重して、それを彼らの子孫にしっかりとつないでいくお手伝いだと思う。協力隊員としていた時にはそのような思いには至らなかったが、地域の人たちをrespectし、その気持ちが結果的に地域の人たちに伝わっているのなら、それなりのインパクトがあったと思いたい。廃業したロッジで地域の人たちの想いの一端を垣間見た瞬間、地域の人に寄り添うことが最優先だと直感的に思ったのは、間違っていないと今でも思う。



## 協力隊活動を今振り返って感じること

大西 孝規さん

(チャサ／理数科教師／チャサ中高等学校／H4(1992)年度1次隊)

ザンビアでの協力隊活動は、辛かったり苦しかったりした思いの方が多い気がします。それでもザンビアが好きになり、今でも帰りたと思うのは、やはりザンビアに良い印象があるということでしょう。

英語が壊滅的にできなくて生活力もなかった私に、このまま任地に送ったらきっと死ぬ、と思った当時の調整員は着任時オリエンテーション中に料理を教えてくださいました。

任地での活動は、まず英語を聞き取る、話すところからでした。根気よく会話を続けてくれ、食事に招待してくれる同僚たちには感謝しかありません。授業ノート通りにしか進められず、あとは板書任せという授業を受けさせられた生徒たちには、申し訳なさしかありませんでした。自分の活動のできなさと生活のしんどさに嫌気がさした私は、赴任そうそう事務所に電話をかけ、日本に帰りたいたいと調整員に訴えましたが、うんとは言ってくれず再考するよう促されました。自分が調整員であれば、こんなやつサッサと日本に帰したと思います。こんな隊員だった人間が、長いこと協力隊事業に関わり、調整員までやっているのは、私を受け入れ助けてくれたザンビアの人々と上述2名の調整員のおかげです。先輩や同期の隊員にも大変助けられました。かなりの頻度でドミで腐っていた私を気分転換させてくれたのやはり隊員でした。

調整員としてザンビアに赴任することになった時、壮行会を開いてくれたOVの皆さんがロ々に「大丈夫か？頑張れよ」と言ってくれたのは、隊員時代のことを知っている方々だからこそでしょう。

隊員活動終了後20年ぶりに調整員として戻ったザンビアは、立派なショッピングモールができ、きれいな病院があり、その発展ぶりにひどく感動しました。さらに感動したのは、仕事で行く先々で、自分の知っているOVの名前が聞けたことでした。50年の隊員派遣の歴史が、このザンビアの発展に寄与してるのだなと感じました。

自分が調整員を目指したのは、ふがない隊員活動を支えてくれたザンビアの人達と調整員への恩返しをしたかったからでした。途上国の発展への寄与と今いる隊員が赴任国を第二の故郷と思えるような環境づくりができたらいいなと思っています。

## ザンビア名Mutinta PHIRI

山本 ひとみさん

(カトゥバ／婦人子供服／クリスチャン子供基金  
／HI6(2004)年度9次隊、HI7(2005)年度9次隊)



### ザンビアの思い出

#### ①-1 うれしかったこと

- ・体調をくずしたとき、次々と食べ物の差し入れとお見舞いに来てくれた。みんなの気遣いが身に沁みて有り難かった。
- ・離任時に生徒さんや友人が手紙をくれた。識字があまりできず、自分の名前も仲間に書いてもらっていた人も手紙をくれた！宝物です。

#### ①-2 辛かったこと

- ・雨期のある日、家の屋根が壊れて落ちた。生徒さんもたくさん来ていて、誰一人ケガをしなかったのは幸いだったなあ。



(写真上) 巨大キノコ

(写真下) 緑多きザンビアの大地と澄み渡る空



#### ②配属先、現地の人との思い出

- ・現地語で挨拶すると、その後の会話もすべて現地語に→そこまで現地語堪能ではないんです…。
- ・人見知りする子がすごくなつてくれた→子どもにはモテた。
- ・お酒を買うとき、身分証明書を求められた→もちろん18歳以上です！
- ・女性同士が取っ組み合いのけんかをして、止めに入った男の人が飛ばされたのを見た→女性は強し。
- ・ミニバス無賃乗車?!  
(ケース1) 知人ではない男性が私の分も支払ってくれた  
(ケース2) 知人になったコンダクター「友人から金はとれねえ」→兄ちゃん、かっこいい！
- ・腰ふりふりダンスを習った(上半身裸で本格的な個人指導)→先生役女性に“hopeless”とさじを投げられ、習得できず。とほほ。

#### ③協力隊活動を今振り返って感じること

隊員時代に電気・水道設備がない村で生活をしたことは、貴重な経験だった。住めば都とはこのことか、と不思議なくらい思い出すのは楽しいことばかりである。たくさんの人に支えてもらった。隊員活動後、NGO、JICAのプロジェクトなど、現在もザンビアで活動しているが、村の友人と連絡をとり、当時の経験が今もずっと生活や仕事に活きている。

## ブラスバンド部の生徒たちと共に歩んだ 2年2ヶ月

高橋 麻友子さん  
(マロレ／音楽／セント・フランシス中高等学校  
／H20(2008)年度1次隊)



首都での訓練が終わったばかりだった、2008年8月。これから配属される学校のブラスバンドが首都へやってきました。そこで演奏していたのは、ピアノカ混じりのブラスバンドでした。見かねて、取れかけたジャケットのボタンつけなどをしていると、「マダムは家庭科の先生なの？」と無邪気に聞いてきた、男の子たち。そう、配属先は男子校だったのです。日本でいう、反抗期の年代です。ちょっとつっぱった雰囲気をもつ彼らに囲まれて、活動が始まりました。



JOCV派遣40周年記念パレード

次の年は、1年ともに過ごしてきた生徒やカウンターパートと共に大会へ向かいました。着任当時、「問題児ばかり」が集まると言われていたブラスバンド部では、着任と同時に部活動停止を言い渡されたり、素行が悪いと退学になった子もいました。カウンターパートと共に、音楽だけではなく、演奏者としてのマナー、人としてのマナーを根気よく指導し続け、この年の大会ではユース部門で2位となりました。生徒たちは大喜びでした。私も生徒たちの熱意に押され、次の年の大会まで、2ヶ月の任期延長を心に決めました。

ところが、いろいろな事情でほとんどの生徒がバンドを離れてしまい、前年度からの12人と、新しく入部した32人で次の年の大会を目指すことになりました。それでもなんとかまとまってきて、大会まで残り4ヶ月というところで、最高のパートナー

だったカウンターパートが教員養成校に異動となってしまいました。さらに大会出発直前に「バスは貸せるがガソリン代は学校負担とする」と州が方針を転換し、校長からは「ガソリン代は出せない。大会は諦めろ。」と言われてしまいました。諦めきれずあちらこちらにかけ合っていると、その様子が校長の耳に入り、最終的には校長よりさらにえらいブラザーがガソリン代を捻出してくれる運びとなったのでした。こうして迎えた出発の前夜。生徒たちの移動中の食事作りを手伝ってくれた家庭科の先生たちが「バンドには優秀な子が集まっているから、遠征も楽しいわよね〜」と言ったのです。2年間に變化した評価と、頑張っている生徒たちを、学校全体で応援してくれているのを肌で感じた瞬間でした。生徒たちもそれを感じていたのでしょうか。全国大会の舞台上で堂々と演奏し、見事優勝したのです。その後、私の後任の代も優勝し続けたと聞いています。

2年2ヶ月、音楽を通して、生徒たちの成長をずっとそばで見られたことは、私にとってとても幸せでした。生徒の成長はもちろん、バンドとして学校から認められ、村から認められ、州から認められ、国から認められる存在となったこと、その過程をサポートできたことを誇りに思います。今でも生徒の一部は楽器を演奏し、他の生徒も各地で活躍していると伝わり聞いています。私も元生徒たちに恥ずかしくないよう、今を生きようと誓っています。



2年間で成長したブラスバンド部の生徒

## シマの思い出

安藤 広実さん

(リビングストーン／村落開発普及員／HIV・エイズ異文化理解促進協会  
／H20(2008)年度4次隊)



ザンビアでの思い出は、食事と切っても切り離せない。シマ、チキン、レイプ、インプワ、カペンタ、チカンダ、グラウンナッツの何とかというやつ、、、などなど。職場では、皆で出し合ったお金でその日の食材と30ml程の油を買ってきて、シマを作った。私が一番よく食べたので、いつも一番大きいシマを取り分けてくれた。たまに私がカレーを作ると、いつもは早食いの同僚たちが、「おいしい、おいしい」とゆっくり味わって食べていた。今思えば、野菜がたくさん、しかも肉も入っている料理というのは普段の物と比べてとても贅沢で、カレーの味というよりはそこが気に入ったのかもしれない。

仕事してないでもっとしゃべるわよ！」なんて怒られたりした(笑)。

今でも、シマの味はもとより、あのトマトと塩と油の絶妙なバランスで成り立つ副菜の味が忘れられない。自宅で調理を試みるも、何が違うのか何が足りないのか、あの味を再現できずにいる。日本のスーパーでは手に入りそうにない身がプリプリのチキンも、調理法が分からないチカンダも、恋しくてたまらない。いつかまた彼らの地へ戻り、彼らの作ったシマを味わうのを楽しみにしている。

振り返ってみると、協力隊での経験はその後の自分の人生を大きく変えた。帰国後は再び大学に入学、教員免許を取得し、高校の教員となった。いま3児の親となり、あの頃の自分がどれほど貴重な経験をしていたのかということが、年を経るほどに新たな価値を帯び、身に染みてくる。また、あんなにしょっちゅうザンビア人とケンカして怒っていたはずなのに、不思議なもので、異文化と向き合うことはなんと刺激的で面白いことだったのか、と今は思う。今でも辛いとき、しんどいときには、ザンビアにいた懐かしい日々のことを思い出し、ひとり癒され、そして励まされている。



学校での活動にて

お隣さんにもよく夕飯のシマをご馳走になった。四畳半程度の小さな部屋で、その日あったいろんなことを話したり、ザンビアのカルチャーについていろいろ教えてもらったりした。食事後はザンビアンミュージックを大音量で流してみんなで踊った。

また、活動でテイラーに出向くことが多かったが、そこでもしょっちゅうごはんをご馳走になった。そこで働く4人の女性たちが私にテイラリング(シャツやズボンの縫い方)を教えてくれていたのだけど、私がいかに集中しすぎると、「そんなに

配属先の同僚と

